



卒業 新たな一歩

下

今年一月、厚生労働省愛知労働局による職場実習受け入れの事業所面談会が刈谷市内で開かれ、十一社が参加した。安城市の県立安城特別支援学校からは二年生二人がそれぞれ、物流センターの清掃、ホテルのリネン作業の実習を目指した。

二人とも希望はかなわず、引率した高等部進路担当の加藤昌子教諭は「やはり緊張してしまい、練習通りにはいかなかった」と振り返る。生徒には「うなぎくだけでなく、『はい』と返事ができればよかったね」と声を掛け、「もう一度話し合って、ぴったりとくる職場を探します」と気持ちを切り替えた。

変わりゆく企業の意識

生徒と企業双方の希望が折り合わず、すんなりと進まないことは多い。今春の卒業生の藤浦萌さん(ひも)「実習先がなかなか決まらなかったことに一番悩んだ」と明かす。

学校は一月、新たに受け入れを検討する企業向けに説明会を開いた。企業の担当者からは「入社後に何か問題が起きた時は全て企業の責任で解決しないといけないのか」といった質問も出た。「障害をどう捉えられるか、戸惑う企業も多い。知的障害の子は向き不向きが大きいことなど、丁寧



①企業との面接に挑む生徒中 ②1月、実習受け入れの事業所面談会で話を聞く参加者ら=いずれも刈谷市内で



に説明していくしかない」。進路指導主事の説田智洋教諭はそう話す。

それでも、企業を訪ねても「うちは必要ない」と門前払いだった十年、二十年と比べると、社会の意識

は変わった。「企業側の理解も大きく進んだ」と西堀哲夫教頭は言う。障害者の法定雇用率は現在、民間企業で2・2%。事業主は法定雇用率以上の割合で障害者を雇用する義務がある。

二〇二二年四月までに、さらに0・1%引き上げられ、2・3%になる。法整備だけでなく、「企業の中に、障害者が働きやすい職場にしようと動いてくれる、熱い思いの人が本

当に増えた。この上ない応援だ」と西堀教頭。職場内での配慮はもちろん、卒業生が私生活でのトラブルに巻き込まれた際に、職場の人が解決に乗り出してくれたこともある。「多くの人が卒業生を支えてくれている」と感謝する。

生徒たちが希望を持って人生の新たなステージに踏み出すために、高校の三年間で何を教えればいいのか。教員の側も迷いながら、生徒とともに奔走している。

その胸には「仕事を通して誰かに『ありがとう』と言われることが、これからも続く人生のモチベーションになってくれれば」との願いがある。四月になれば新三年生が、進路決定に向けて本格的なスタートを切

(この連載は四方さつきが担当しました)

◇ 次回は四月、縫製や木工、籠作りなど、学校内での実習の様子取材します。